

NIHでの留学生活

National Human Genome Research Institute, NIH

徳舛 麻友

(京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻)

2018年10月より米国メリーランド州にあるNIHに留学しています。NIHは27個の大研究機関から構成されており、私はその中のNHGRIに所属しています。NHGRI内には、さらにいくつもの研究分野、研究室があり、私はTranslational and Functional Genomics BranchのDr.Liu研究室でポスドクとして研究に従事しています。

私の研究は遺伝子改変マウスモデルを用いた白血病発症機構の解析です。大学院生の時から研究していた小児の急性骨髄性白血病のサブタイプの一つについて、さらに疾患の根本原因に近づくことを目的とした研究をしています。NIHでは様々な専門的研究部門と連携する体制が充実しており、私が所属する研究室もNHGRIのマウスコアやゼブラフィッシュコア、バイオインフォマティクスコア、フローサイトメトリーコアなどと連携し、そしてさらに、NIHクリニカルセンターと共に臨床研究も行っており、一人ひとりが独自の研究テーマを持って幅広い研究を展開しています。このように、効率よく先端技術を取り入れた発展した研究を行えることが、NIHでの研究の魅力の一つであると思います。私の場合、マウスモデルの作成から開始しましたが、NHGRIマウスコアの多大な助けのもと目的のモデルマウスの完成にこぎつけることができました。また様々な研究部門の研究者や技術者の方々との交流を通して、研究技術や知識の向上とともに自身の英語力も鍛錬されています。

私の研究室の研究者のほとんどが子育て中のため、柔軟な勤務体制を許容しており、子育てしながら研究しやすい環境にあります。しかし、ボスとの個人ミーティングや、全体ラボミーティングではボスからの鋭い指摘や要求があり、最初の一年間は一心不乱に頑張り、それにより、ボスや研究室の同僚から信頼を得られるようになったと感じています。ボスは年に1、2回、自宅で家族ぐるみのパーティーを催します。そこでのささやかな音楽やゲームを同僚達と企画するのも私のちょっとした仕事になっています。幸いにして毎回大盛況なのでやりがいがあります。

ご存じのように、2020年3月の中旬に入ってから、COVID-19が全米に拡がり、研究室への立ち入り制限、外出禁止令が施行されました。4月末現在、1か月以上もの間、自宅でテレワークを行う日々が続いており、実験そのものは停滞しています。私の研究室は週に1回オンラインミーティングを行って情報交換を続けています。また、NIHからは様々なオンラインセミナーが提供され、情報収集には事欠きません。特にありがたいのは、バイオインフォマティクス関連のセミナーが充実していることです。厳しい状況の下ではありますが、

これを機にこれまであまり勉強できていなかったバイオインフォマティクスについてじっくり勉強して、自身の研究者としての研鑽を続けたいと思っています。

最後になりましたが、このような貴重な留学の機会を与えて下さいました上原記念生命科学財団の皆様、京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻の諸先生方に深く御礼申し上げます。